

## ハハハハハ歯の浮くでさざざと

志茂田景樹

父は歯が丈夫で、50代になってもビールの栓をガリリと歯で開けていた。僕はとりわけて歯が弱かったわけではないが、子どものときは何しろ甘いものが好きで、むし歯がシーシー痛む嫌な思いを何度もしていた。

子ども心にガリリと栓を開けてニタッと笑う父に対し、ワニのいる沼で生まれたのではないかと反発していた。長じて甘いものの代わりに、ブランデー、泡盛、焼酎等の強い酒を受飲するようになって、歯は丈夫になった。ストレートで飲むと、むし歯菌が死滅するのだろうか。歯医者さんは目をむくだろうけれど。

でも、子ども時代の歯の不摂生が祟り、左下最奥歯は抜いており、右上の最奥歯から2本目も欠損してブリッジになっている。一応、その2本以外はすべて自分の歯だが、むし歯の治療痕のある歯が何本もある。73歳という歳でこれはいいほうか悪いほうかは知らないが、差し歯や入れ歯のお世話にはなっていない。

20代半ばのころ、右下最奥歯を治療してもらったとき、歯科医師が「金冠を被せませんか」と勧めてきた。

「金歯ギラギラは嫌だなあ。田舎のおじさんおばさんみたいで」と断ったが、「奥歯に1本、金色に輝いているのは奥ゆかしいですよ。お安くしておきます」と、何だか熱心に勧めてくるので、「まっいつか」と金冠を被せてもらった。

そのときのガールフレンドが、「笑うと素敵」と言ってくれたので、後悔はしなかったが、いま振り返るとどうも怪しい。金冠をいくつも被せている歯の持ち主が、総入れ歯をすることになって、それで要らなくなった金冠を溶かして作り直し僕の歯に被せたのではなかったか。

その金冠はそれから3、4年後、僕の右下最奥歯から忽然と消えた。

そのとき、いま風に言えばクラブ、20数年前ならディスコ、当時はゴーゴーホールと呼ばれていたところで、烈しく踊っていた。喉が渇いてテーブルに戻り、コークハイを一口飲んでポテトチップスを口に入れたら、何だか噛んだ感じがおかしい。舌でその辺りの歯を撫でると、右下最奥歯から金冠がなくなっていた。さてはフロアだ、と戻って踊っている人たちの

足許に目を凝らしたが、見つからなかった。

「ああ、やはり、金歯なんかにするんじゃないかと、保険がきかなかったため、僕としては大枚をはたいたことを後悔した。まっ、いずれにしろ、治療しなければいけない。

翌日、別の歯医者にかかった。

「外れたものをお持ちならそれを使いますよ」

「口から飛ばしちゃったんですよ。ゴーゴー、がらがら踊っていたので気がつかなかったけど。そこ、金歯だったんです」

「えっ、金歯！ 不動産の方ですか？」

歯医者は驚きながら、保険のきくものを被せましょう、と言ってくれた。

その夜、仮歯を被せてもらったので、普通に飲み食いできるしということで、友だちとトリスバーに入った。ハイボールを2杯ほど飲んだ頃、便意を催し、トイレに入った。

水洗式だったけれど、腰かけではなく、屈むタイプの便器だった。便意の割には排出されたのは少量で、コトッと微妙におかしな音が混じった。立ち上がって水洗の紐を引いて排出したものをみると、表面に金冠が光っている。

「アタタタタ…」

と、泡を食ったが、時すでに遅く、勢いよく流出した水は便を金冠もろとも排水口に押し流した。汚水に化して渦を巻いたとき、一瞬、金冠は浮き上がってから沈んだ。

「ハハハハハ」

僕は歯の浮くような声で笑うしかなかった。

志茂田景樹（しもだかげき）

1940年、静岡県生まれ。小説家、絵本作家、タレント。現在は、「よい子に読み聞かせ隊」を結成し、自ら全国各地で読み聞かせを行い、童話・絵本執筆も手がけるなど、社会活動を行っている。主な著書に、『黄色い牙』（講談社）、『汽笛一声』（プレジデント社）、『蒼翼の獅子たち』（河出書房新社：映画「学校をつくろう」原作）など多数。

